



## これまでそしてこれからの祖父の「道」

仙台市立幸町中学校 1年 鈴木花奏

「今年中に運転免許を返そうと思うんだ。」

食卓に家族が揃うと、突然祖父が改まった口調で話し始めた。間もなく後期高齢者と呼ばれる年齢の祖父。以前から、もうそろそろと口にしていたが、ついに運転を卒業しようかと決断したようだ。

祖父は、高校卒業後に自動車運転免許を取得し、これまで半世紀以上もの間、車の運転をしてきたそうだ。その期間は私が生きてきた時間の四倍以上だ。いったいどれだけの時間、どれだけの距離を走ったのだろう。その道の上にはどのような思い出があるのだろうか。

普段は口数の少ない祖父だが、運転を始めた頃、住んでいた気仙沼にはまだ舗装されていない道が多かった、と目を細めて話してくれた。一番の思い出を尋ねると、就職してから退職するまでの約四十年、毎日同じ道を運転したことだと笑った。そして、そこから見る海の色が大好きだったと聞かせてくれた。

現在、祖父が通勤していたその道は大きく姿を変えているという。十年前の東日本大震災で、祖父の暮らしていた地域一帯が壊滅的な被害を受けたからだ。復興が進み、新しい道はほとんど内陸に移されて、もう同じ景色を見ることはできないそうだ。

震災後、仙台へ引越してきた祖父。自宅や多くの仲間を失い、住み慣れた故郷を離れるなんて、その辛さや苦しみは想像もできない。それでも、高齢になってから新しい道をたくさん覚え、孫を乗せて運転できたことも嬉しい思い出と話してくれた。私も、家にいる時よりちよつぱりじよう舌になる、運転中の祖父が好きだ。

祖父が運転を卒業したら、一緒に電車で出掛けてみよう。そういえば、仙台でバスに乗ってみたいとも言っていた。祖父がこれからハンドルを握らずに進む道でも、素敵な思い出がたくさんできますように。そしていつか、私の運転する車に祖父を乗せ、その道を走ってみたい。

(審査評) この作品は「道」というものを、実際の通路としての道と、軌跡としての道の二つを、そして作者自身が生まれる前、その後の震災後、そしてこれから先の時間軸を上手く交差させて描いている。その表現はとても豊かでまるで目の前にその景色を映し出してくれるようだ。自分の想い、おじい様の回想シーンや想いなども読み手に自然にわかる構成が素晴らしい。

酒井久美子